

研修部の金丸です。私からは視覚障がい者の日常の中にあるICTについてお話しさせていただきます。

信号が赤か青か分からず、足を止める。そんな場面は、視覚障がい者の日常に珍しくありません。本や新聞、回覧板が読めない、飲食店の券売機で食べたいもののボタンが分からなど、日々の暮らしには多くの不便さがあります。こうした不便さは、視覚から情報を得ることが難しいことによって生じます。

近年、スマートフォンの普及や技術の進歩により、状況は少しずつ変わってきました。「視覚障がい者はスマートフォンを使えるのか」と疑問に思う方もいるかもしれません、実際には多くの人が日常的に活用しています。画面の色や文字サイズを変更できる機能や、音声読み上げ機能など、見え方に合わせた設定が整ってきているためです。

音声読み上げ機能には、画面全体の情報を一度に読み上げるものや、指で画面に触れるとその部分の情報を読み上げ、タップやスワイプで操作できるものがあります。さらに、音声アシスタント機能を使えば、今日の降水確率を調べたり、作成しておいた買い物リストを呼び出して確認したりすることも可能です。

また、近年は生成AIの進化により、写真を撮影するとその内容を説明してくれるサービスも登場しました。例えば、家の玄関を外から撮影すると、郵便受けの位置や車の色、窓の開閉状況まで教えてくれます。質問を重ねれば、より細かな情報も得られます。こうした技術は、これまで人に頼らなければ得られなかった情報を、自分で入手できるようになったことを示しています。

しかし一方で、技術の発展が新たな壁となることもあります。コロナ禍以降、非接触での注文や案内が増え、タッチパネルや液晶画面による操作が一般化しました。これらは画面表示に依存するため、見えない人にとっては自力での操作がほぼ不可能です。券売機や施設案内端末でも同様の問題が起こり、配色や明るさによっては弱視の人でも操作が困難になります。スマートフォンでも、アプリの設計が適切でなければ音声読み上げが機能せず、操作できない場合があります。

例えば、ある企業が自社製品をアプリ経由で設定変更できるようにしている場合、本来は画面上に操作ボタンが表示されているはずです。しかし、音声読み上げ機能に対応していないため、ボタンに触れても名称が読み上げられません。この場合、一つひとつのボタンを押し、機能を試しながら確認する必要があります。

さらに、会員ページへのログイン時に、人間かロボットかを判別するためのパズル型セキュリティ認証を導入しているサイトもあります。こうした認証は画面操作が必須であり、代替手段がなければ、見えない人はそのページにアクセスできません。こうなると、便利なICTもかえって障壁を増やす結果になります。

このように、視覚障がい者がICTから得られる恩恵は、使用する端末やその中で動くソフトウェアの設計に大きく左右されます。アクセシビリティとは「利用しやすさ」「アクセスのしやすさ」を意味し、多様な人々が利用しやすいように考えられたサービスや機能を指します。アクセシビリティが考慮された端末やサービスは、視覚障がい者にとっても利用しやすいものが多いです。ICT機器は、実際に使ってみなければ分からぬ部分もあります。そのため、限界を理解しつつ活用していくことが大切だと思います。

今回の内容が、視覚障がい者の日常におけるICT活用の一端を知っていただききっかけになれば幸いです。